

## 都市近郊林と自然公園における野生動物への餌付けを利用者意識

環境資源学専攻 森林緑地管理学講座 花卉・緑地計画学 稲場 彩夏

### 1. 緒言

野生動物への人為的に食物を与える行為は、個体数保護目的の給餌や、娯楽目的で野外レクリエーションの一環としての餌付けなど、様々な形をとって世界各地で行われている。野外レクリエーションとしての餌付けは、野生動物の餌への依存、攻撃的な行動の変化などの野生動物自体や生態系への影響、感染症などの人間への影響も懸念されている。わが国では、市町村条例で野生動物への餌付けを禁止する自治体も増加し、北海道では「北海道の生物の多様性の保全等に関する条約」により、2015 年より全道でのヒグマへの餌付けを禁止している。レクリエーション利用を規制するには、利用者や住民の理解と協力が欠かせないが、野生動物への餌付けに関する意識に関する研究は少ない。本研究では、餌付けの対象や保護規制の制度が異なる都市内の森林と、国立公園の利用者を対象に、その意識を明らかにし、今後の管理の必要性和展望、課題を考察した。

### 2. 方法

小動物や野鳥への餌付けが問題視されている札幌市円山公園と、ヒグマやキツネへの餌付けと利用者の接近が問題視されている知床国立公園において、公園利用者に意識調査用紙を配布し、郵送での返送を依頼した。調査票は、属性や野生動物への態度、餌付けへの態度、野生動物との望ましい距離、対策の是非とその内容などの項目で構成した。円山公園では、利用者の多い 6 月に 500 部、10 月にも 500 部の計 1,000 部を配布し、548 部の有効回答を得た（有効回答率 54.8%）。知床国立公園では、利用者の多い 7 月に 608 部、9 月に 600 部の計 1,208 部の調査票を配布し、492 部の有効回答を得た（有効回答率 40.7%）。

### 3. 結果と考察

野生動物への餌付けについて、円山と知床の利用者は「楽しい」「自然とのふれあいである」と好意的にとらえる人は少なく、「餌に依存させてしまう」「他個体・人間を攻撃するようになる」と否定的にとらえられていた。野生動物との距離は、ヒグマは人間と遠距離のほうがより望ましく、シジュウカラやリスなどは、肉眼で見える距離までが望ましいと認識されていた。さらに、80%以上の回答者が餌付けへの対策を必要と回答し、小動物には情報提供等の間接的な手法が、ヒグマやキツネには罰則などの厳しい対策が望まれていた。しかし、一部に餌付けを好意的にとらえる回答者がおり、そういった回答者ほど、小動物が自ら近寄ってくることを望ましいとし、対策も必要ではないと認識していることが明らかとなった。また円山と比べて知床の回答者のほうが、餌付けをより否定的にとらえて、対策を必要とした回答者の割合も高かった。

### 4. まとめ

回答者の大半は、餌付けを否定的にとらえ、対策が必要と認識していたが、対象種や調査地により回答には相違があった。一部に餌付けを好意的にとらえている回答者もあり、対策への認識も異なっていた。自然観光地や野生動物の管理においては、これらの相違に配慮しつつ、その対策を検討する必要があるだろう。